

なぜ中国で民主化運動が進まないのか？

——クーデター・ゲームによる 2000 ドル仮説再検証

保原伸弘

一橋大学

袁 堂軍

復旦大学/一橋大学

今日、報道でみるようにエジプトやリビアなど中東での民主化への動きが著しい。ここで民主主義の達成と経済発展や資本主義経済の体制としての充実は無関係ではなく同時に進むと考えられる。中村(1993)は世界諸国の民主化が成功するタイミングは、一人当たり GDP ないし GDP が 2000 ドルになるときであるという経験則を提示している。

しかし、一方で、この民主化の 2000 ドル仮説があてはまらない、中国という最大の例が存在する。中国の一人当たり GDP は 2000 年代以降、2000 ドルをはるかに越えた 4000 ドル程度であるにもかかわらず、体制としての社会主義は維持されている。一方で GDP が 2000 ドルそこそこの 1980 年代の方が民主化への動きは今より活発である。

本稿では、一人当たり GDP が著しく伸びたにもかかわらず中国での民主化が本格的には進まない事実の説明を、民主化をうむきっかけを作る政治的リーダーの非在に求める。すなわち、民主化は、多数の民衆がなんの秩序もなく、その時の政府を倒そうとして成功するものではなく、政策に不満を持ったリーダーが民衆を誘導する指導力があってこそ実現すると考える。2000 ドル仮説のように単に一人当たり GDP ではなく、民意を束ねるリーダーの統率力を裏付ける経済力の分析にも注目しなくてはならないと考える。

本稿は Sutter(2000)に進化ゲームの枠組みを与え、クーデター・グループの存在およびグループと政府とが施す政策、報酬あるいは罰則によって、(i)政府が安定的な勢力を握る。(ii)クーデターを主導するリーダーのもと安定化する。(iii)政府とクーデター・グループの間に勢力の均衡により社会は安定する。(iv)政府とグループの間に勢力の均衡が成立せず、社会は不安定になる。といった異なる社会状態に至ることを指摘する。それを踏まえて、1980 年代の中国はリーダー層の政府への「取り込み」が十分に行われていなかったため、リーダー層に民主化への十分な動機が存在し、民主化への動きが先鋭化したと考える。一方で、2000 年代以降は中国政府によるリーダー層の政府への「取り込み」が活発に行われたため、民主化への十分な動機が減退し、民主化への動きが弱まったと考える。しかし、群体性事件にみられるように地域レベルでの民衆の民主化を求める動きは経済の高まりとともに存在し、民意を束ねるリーダーの登場によって、全国的規模の民主化運動に発展する可能性があることを指摘する。